北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報　第２号　（１～８）
Bulletin of the Northern Regions Lifelong Sports Research Center Hokusho University Vol. 2
2011年７月
July, 2011

産官学連携事業による江別市のスポーツ振興策について
－プロバスケットボールチームに関する調査報告－

A study on sports promotion policy in Ebetsu city through cooperation among industry, local government, and universities
－Report with regard to professional basketball team－

永　谷　　稔[1)]　千　葉　直　樹[2)]　石　澤　伸　弘[3)]

Minoru NAGATANI　Naoki CHIBA　Nobuhiro ISHIZAWA

キーワード：産官学連携，スポーツ振興策，レラカムイ北海道，江別市，北翔大学

Abstract

This research examined sports promotion policy in Ebetsu city through a questionnaire of residents to find out whether they know cooperation among industry, local government and universities. In particular, this survey focused on sports promotion policy that cooperate Ebetsu city with a professional basketball team, "Rera Kamuy Hokkaido", Hokusho university. The results of survey outline as follows；

1）The residents of Ebetsu were very positive in terms with exercise and sports. 87.9% of the residents answered that they liked exercising and watching sports.
2）51.4% of the residents took exercise from a few minutes in a day, regularly two or three days to everyday during a week.
3）Only 28% of the residents used sports public facilities in Ebetsu.
4）Most residents did not watch a game of Rera Kamuy from the gymnasium and participate into any event of professional basketball team. Thus, it seems that Rera Kamuy was not popular for the residents of Ebetsu because of the lack of advertisements.
5）89.1% of the residents hoped that regular game and events of Rera Kamuy were held in Ebetsu through cooperation among industry, local government and universities.
6）The residents expected regular games and many events in Ebetsu.

As results of the questionnaire, cooperation among industry, local government and universities has a possibility to increase rate of sports participants and opportunities to watch many sports events.

Key words：Cooperation among industry, local government and universities, Sports Promotion Policy, Rera Kamuy Hokkaido, Ebetsu City, Hokusho University

Ⅰ．緒　　言

産官学連携とは，産業と国や自治体と学校が連携し，様々な事業を進めていくものであり，このことは，もはや説明するまでもない。文部科学省においても，大学における産官学連携方策を数多く推進しており，平成20年度では，共同研究件数で17,638件を数え，前年比1,427件（９％増）[1)]と過去最高となっている。

スポーツにおける産官学連携としては，埼玉大学がさいたま市と大塚製薬の連携による，さいたま市の各スポーツ団体所属の指導者を対象に事業を展開している[2)]。筑波大学と学術的な連携を図っているつくばウエルネスリサーチは，自治体と関連企業とともに研究開発やコンサルティング，研修会，人材育成を行っている[3)]。

このように，産官学による連携を行うことは，産業としては，大学との研究開発協力やモノづくりに役立てられる。また，官である自治体などは，行政機関として双方の橋渡しなどにより住民サービスが向上する。さらに，大学においては，知的財産による地域貢献ができる。産官学による連携は，双方にとっても互いにメリットがある事業である。

１）北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科　Department of Sport Education, School of Lifelong Sport, Hokusho University
２）北翔大学短期大学部人間総合学科　Department of Liberal Studies, Hokusho College
３）北海道教育大学岩見沢キャンパススポーツ教育課程　Department of Sport Education, Hokkaido University of Education Iwamizawa campus

本学では，平成21年２月に江別市内４大学と江別市商工会議所との包括連携協定が締結され，大学と市の連携によるまちづくりのプロジェクトが推進された。そして，平成21年７月13日，江別市およびプロバスケットボールチーム「レラカムイ北海道」を運営するファンタジア・エンタテインメントと連携協定が締結された。連携協定の内容は，江別市におけるスポーツ振興，スポーツ文化の向上，スポーツを通じた青少年の育成及び住民の健康づくりに資する研究や取り組みを推進する連携協力に関する協定である。

江別市は，札幌市と隣接をする人口12万人都市であり，面積18,757ha（東京23区の約３割）である。市内には４大学が存在し，研究学園都市としてさまざまな取り組みが実施されている。近年市内研究施設においては，生産者・製造業と連携し，地域ブランド作りへの挑戦などが盛んになっている。平成21年度には，大学連携調査研究事業として，江別のまちづくり・地域活性化に関する調査研究補助事業を展開し，本研究はそのひとつに採択され実施されたものである。

本研究調査実施の先行研究として，稚内市および釧路市における「レラカムイ北海道」の観戦行動調査を実施した[4)]。この研究の目的は，道内における札幌市近郊以外での公式戦開催市である稚内市や釧路市での「レラカムイ北海道」の観戦行動の特徴を明らかにするものである。稚内市や釧路市での公式戦観戦者の半数以上は，開催地の住民という結果が明らかとなった。また，初めて観戦した割合が約半数を占め，「レラカムイ北海道」ファンというより，バスケットボールが好きという理由が観戦行動になっていることが明らかとなった。また，札幌市で開催された「レラカムイ北海道」の観戦行動調査結果[6)]では，観戦者の居住地の７割以上が札幌市内であり，札幌市以外は道外を含めても３割に満たなかった。これらを踏まえ，江別市は札幌市に隣接する市であるが，江別市内において公式戦開催によって江別市内住民が観戦行動をとり，また，その観戦行動をきっかけにリピーター化，あるいはその後の関連イベント参加などへ継続行動をとるのではないかと考えた。

そこで，本研究では，江別市民の「レラカムイ北海道」の公式戦観戦行動に関する現状を調査し，その結果を明らかにすることを目的とする。そして，それら結果をもとに，産官学連携方策を検討し，江別市において「レラカムイ北海道」によるスポーツ振興を目指すものである。江別市民の現状を把握するため，江別市内全域の全世代を対象として，運動やスポーツに関する意識や現状についても明らかにし，「レラカムイ北海道」の公式戦以外のイベントの参加行動も明らかにするものである。先行研究では，他のプロスポーツ公式戦観戦行動も調査していることから，プロ野球北海道日本ハムファイターズとプロサッカーＪリーグコンサドーレ札幌の公式戦観戦行動も調査し，その結果を比較するものである。

Ⅱ．方　　法

本研究では，江別市民の「レラカムイ北海道」への観戦行動に関する現状調査を，平成22年４月から５月に実施した。江別市の人口約12万人に対して，無作為抽出により１万3,500世帯に４部ずつ配付し，世帯全員が回答いただくよう文書で示した。別納返信用封筒により1,507サンプルが回収された。回収率は11.2%であった。

調査内容は，性別，年齢，居住地区，職種の基本属性，運動が好きかどうか，1週間当たりの運動時間，江別市内のスポーツ施設の活用度，中学・高校時代の部活動経験，レラカムイ北海道公式戦観戦回数，北海道日本ハムファイターズ公式戦観戦回数，コンサドーレ札幌公式戦観戦回数，その観戦理由，レラカムイ北海道のイベント参加行動，産学官連携事業についての自由回答である。

調査結果を参考に，産官学が連携した，江別市における「レラカムイ北海道」によるスポーツ振興策とは，どのような方策であるかを検討するものである。

Ⅲ．結果の概要

１．回答者の属性について

図１は，回答者の性別を表すものである。回答者のサンプル数のうち，女性は786サンプル，男性は720サンプル，ほか１名は不明であった。割合では，女性が52.16%，男性が47.78%であり，江別市の統計とほぼ同じ値を示した。

図２は，回答者の年代を表すものである。回答者を10歳代毎に区分し，江別市統計と比較すると，50歳代，60歳代，70歳代では統計値より多くなり，一方，10歳代から40歳代，80歳以上では統計値より少なくなった。このことは，江別市の人口統計上とは異なるかたちとなった

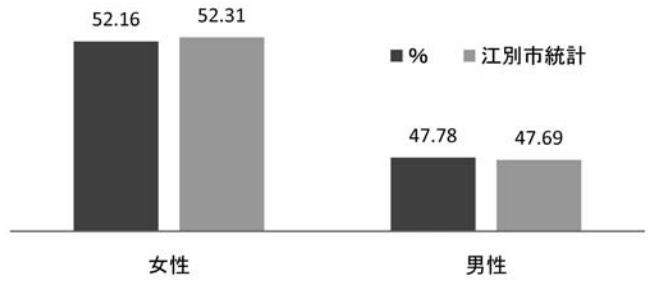

図１．回答者の性別

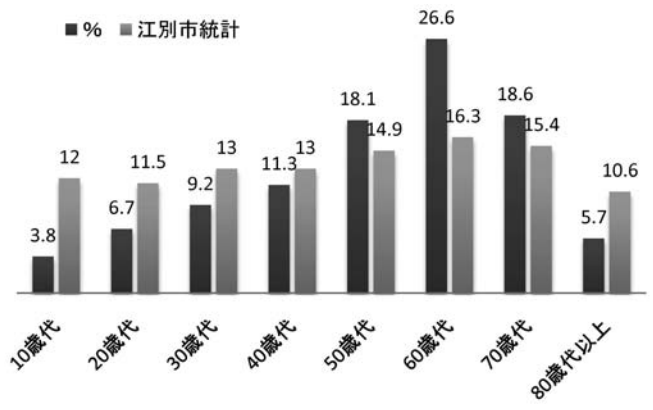

図２．回答者の年代

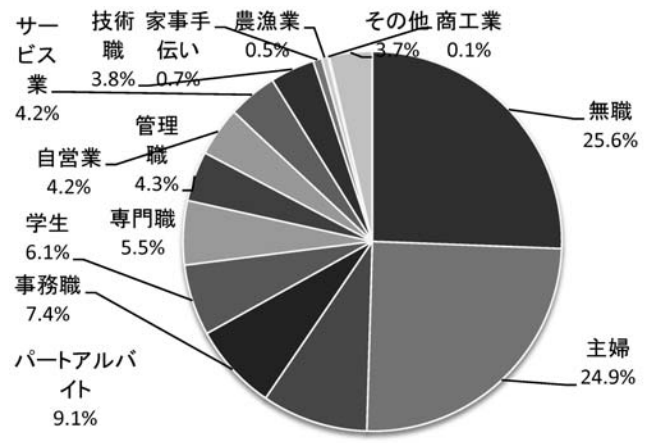

図３．回答者の職業

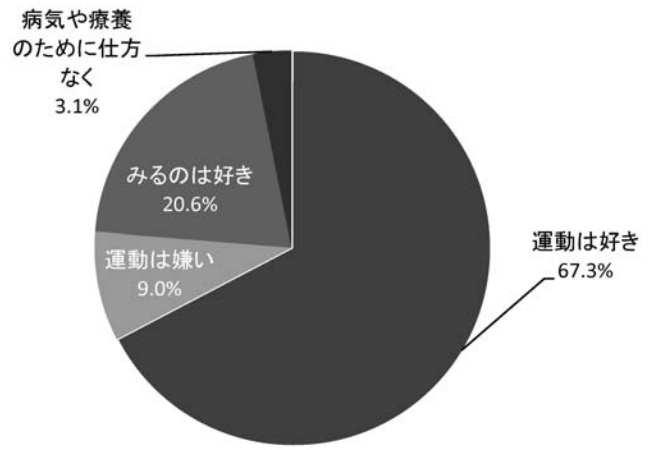

図４．運動が好きかどうか

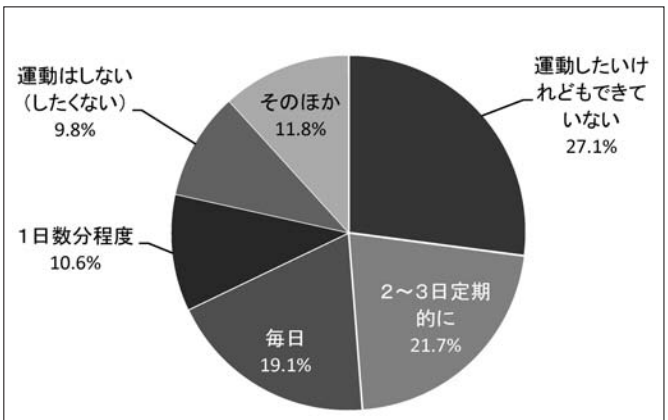

図５．１週間の運動時間

ため，正確に江別市民の意識を表すものであるとは言えない。統計値に近似する割合で回答が得られれば良かったのであるが，本研究で実施した質問紙の配付方法および回収方法では限界があると考えられる。50歳代から70歳代の意見を参考に方策を検討することには有益であると考える。

図３は，回答者の職業を表したものである。回答者の職業は，無職が25.6%，主婦が24.9%，以下パートアルバイトが9.1%，事務職7.4%，学生6.1%，専門職が5.5%，管理職4.3%，自営業4.2%，サービス業が4.2%，技術職が3.8%，家事手伝い0.7%，農漁業が0.5%，商工業が0.1%，その他が3.7%であった。回答者の年代が50歳代から70歳代が多いことから，無職と主婦が多い結果となったと考えられる。

２．回答者の運動実施状況について

図４は，回答者が運動が好きかどうかを表したものである。運動は好きが67.3%であり，みるのは好きが20.6%と合わせると，９割近くが運動に対しては好意的であることがうかがえる。しかしながら，運動は嫌いが9.0%，病気や療養のために仕方なくが3.1%であり，こうした約１割のネガティブ回答者あるいは潜在的な運動者にこそ，スポーツ振興を促していかなければならないと考える。

図５は，回答者の１週間の運動時間を表したものである。運動したいけれどもできていないが27.1%で最も多く，次いで，２～３日定期的にが21.7%，毎日が19.1%，１日数分程度が10.6%であった。運動はしない（したくない）が9.8%であったものの，１週間のうち何らかのかたちで運動している回答者が51.4%であった。平成12年策定のスポーツ振興基本計画に掲げる，成人の週１回以上の運動実施率（50%以上）[5]を上回る結果となった。

図６は，回答者の江別市内スポーツ施設の活用について表したものである。活用しているが28.0%であるのに対して，活用していないが69.0%であった。図７は，活用していない理由を自由記述したものである。時間がないが96名であったものの，必要ないが53名回答している。

また，他の活動をしているが37名，忙しいが35名，病気や怪我でできないが31名，ウォーキングなどの軽運動を27名，実施内容が分からないが26名，不便であるが14名，遠いが14名，実施内容が合わないが12名，仲間がいないが10名であった。その他10名以下の少数意見も含めると，実施内容が分からないや合わない，仲間がいないチャンスやきっかけがない，遅い時間にやっていないなどのマネジメントが介入できる問題について多く挙げられていた。

表１，２は，回答者の中学高校時代の部活動経験と運動が好きかどうかについてクロス集計し，カイ二乗検定を実施したものである。いずれも１％水準で有意な値が示された。中学高校ともに運動部活動経験がある回答者は，運動が好きである傾向が強く，中学の運動部活動経験がない，あるいは文化部経験がある回答者であっても，運動が好きである傾向が明らかとなった。また，運動部活動経験がなくても，みるのは好きが３割前後存在していることが明らかとなった。しかしながら，運動部活動経験がありながら，運動が嫌いと回答したものが少数存在していることや，文化部あるいは部活動経験がない回答者で運動が嫌いと回答したものが１割強存在していることから，こうした回答者に対して，どのようなアプローチをしていくべきか検討しなければならない。

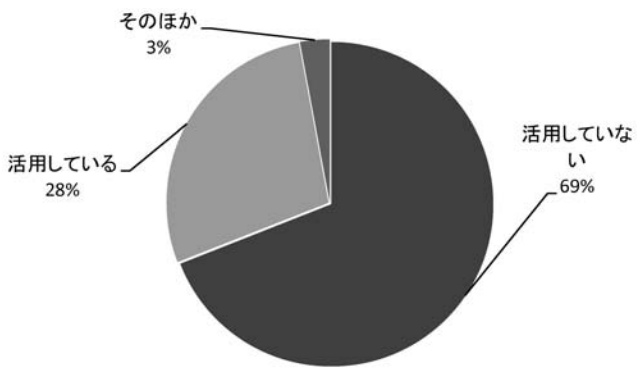

図６．江別市内スポーツ施設の活用について

３．公式戦観戦回数について

図８，９，10は，回答者の公式戦観戦回数をそれぞれクロス集計し，カイ二乗検定を実施したものを折れ線グラフ化したものである。いずれも５％水準以下で有意な値が示された。レラカムイ北海道公式戦観戦回数は，ほぼなかった（93.0%）。また，北海道日本ハムファイターズ公式戦観戦回数も，なしが最も多くを示した（39.6%）。さらに，コンサドーレ札幌公式戦観戦回数も，なしが多かった（77.7%）。これらの結果は，回答者が50歳代か

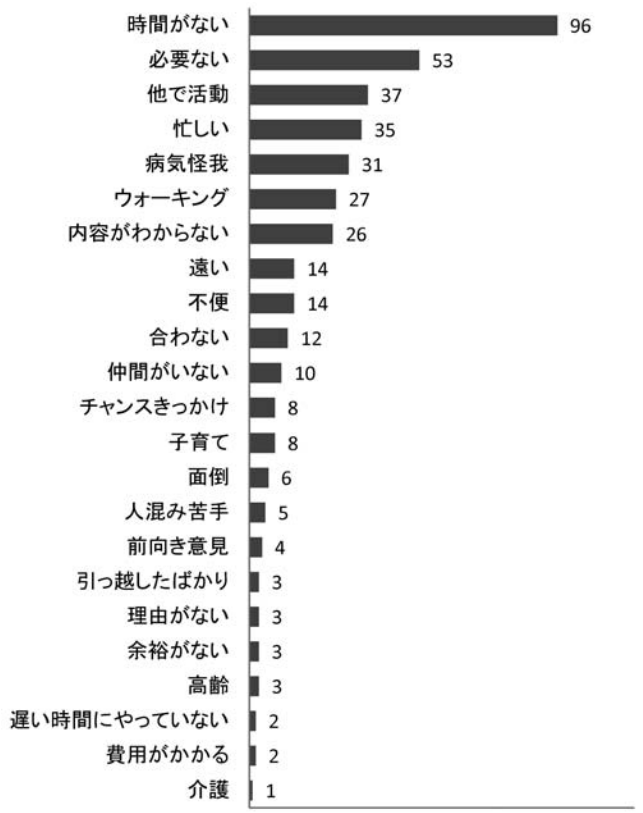

図７．活用していない理由（自由記述回答まとめ）

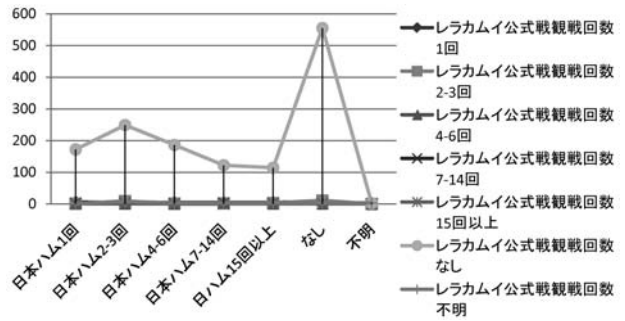

図８．レラカムイ北海道公式戦観戦者の日ハム観戦回数

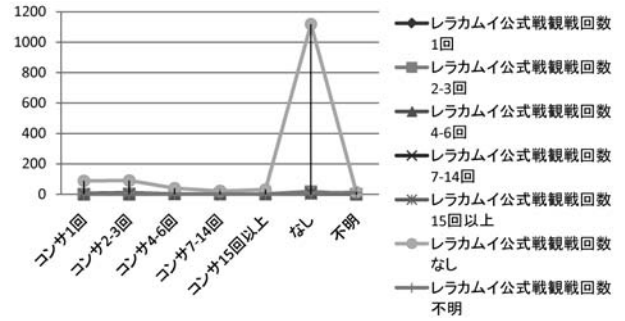

図９．レラカムイ北海道公式戦観戦者のコンサ観戦回数

表１．中学校時代の部活動経験と運動好きの関係

	中学校運動部		中学校文化部		中学校経験なし		不明		合　計	
運動好き	635	79.7%	84	46.7%	235	51.3%	52	73.2%	1006	66.8%
みるのは好き	112	14.1%	59	32.8%	124	27.1%	13	18.3%	308	20.5%
運動嫌い	35	4.4%	28	15.6%	68	14.8%	3	4.2%	134	8.9%
病気やリハビリ	12	1.5%	8	4.4%	26	5.7%	1	1.4%	47	3.1%
不明	3	0.4%	1	0.6%	5	1.1%	2	2.8%	11	0.7%

＊＊　p＜.001

表２．高校時代の部活動経験と運動好きの関係

	高校運動部		高校文化部		高校経験なし		不明		合　計	
運動好き	507	82.6%	131	55.0%	289	52.5%	78	76.5%	1006	66.8%
みるのは好き	79	12.9%	65	27.3%	150	27.2%	14	13.7%	308	20.5%
運動嫌い	20	3.3%	28	11.8%	81	14.7%	5	4.9%	134	8.9%
病気やリハビリ	6	1.0%	13	5.5%	24	4.4%	4	3.9%	47	3.1%
不明	2	0.3%	1	0.4%	7	1.3%	1	1.0%	11	0.7%

＊＊　p＜.001

ら70歳代が多かったことが影響したと思われる。そして，実際に公式戦をみる観戦行動より，テレビ中継でみたり，結果を新聞などの報道で確認したり，あるいは身近に来るイベントに参加するような，そのような行動のほうがよりよいのではないかと推測する。

図11は，公式戦観戦理由をまとめたものである。札幌で開催されたからと北海道のチームだからが上位を占めた。これは，競技に関係なく地元のチームを応援する志向が強いことが示された。また，家族に誘われたり，友人に誘われたりすることが観戦動機につながっていることが示された。

４．レラカムイ北海道のイベント参加と連携への期待について

図12は，レラカムイ北海道のイベント参加有無について表したものである。イベントへの参加がないと回答したものが1297名（96.5%）を占めた。学校訪問やグッズ購入，クリニックへの参加など少数はあるものの，ほぼないと言っていい結果であった。レラカムイ北海道が行うイベント事業は，学校訪問やバスケットボールクリニックをはじめ，選手の人数が少ないため開催数こそ決して多いとは言えないが，積極的な姿勢である。しかしながら，PR 不足であったり，有料イベントであったり，そのようなことが影響していると考えられる。

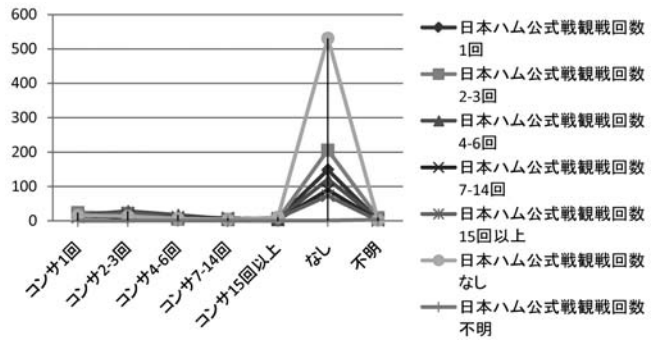

図10．日本ハムファイターズ公式戦観戦者のコンサ観戦回数

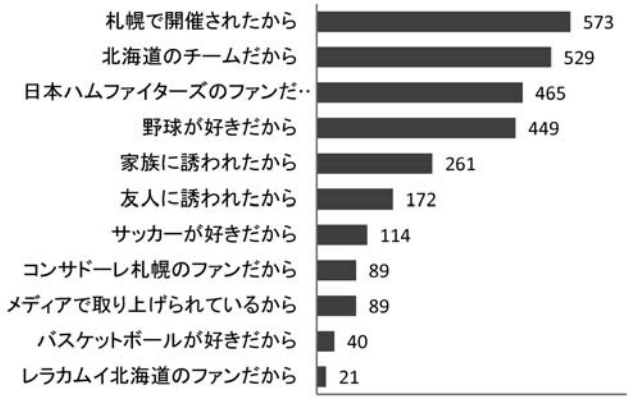

図11．公式戦観戦者の理由

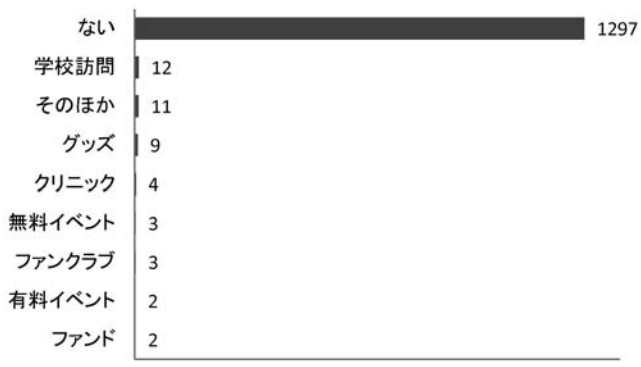

図12. レラカムイ北海道のイベント参加について

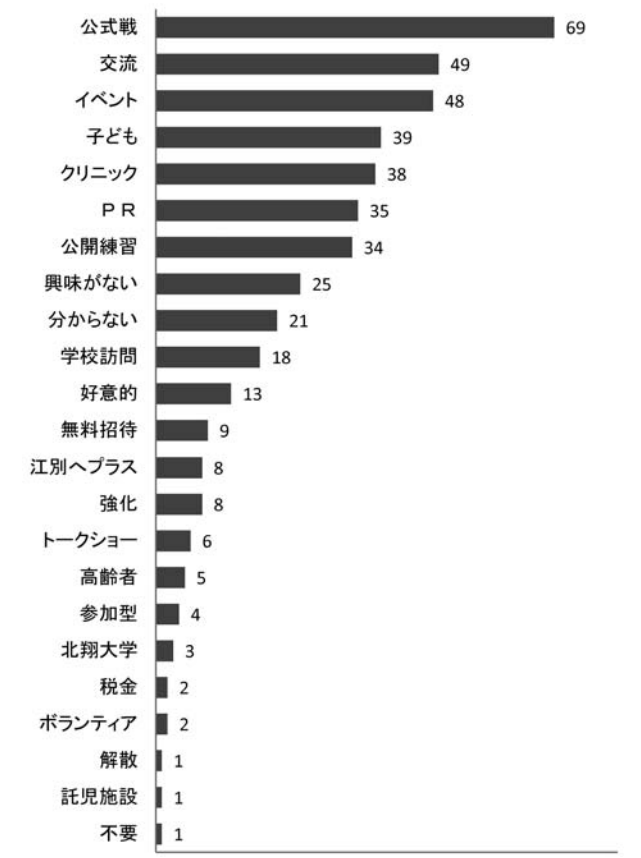

図13. 産官学連携に期待すること（自由記述回答まとめ）

図13は，レラカムイ北海道，江別市，北翔大学の産官学連携に期待する自由記述をまとめたものである。上位３つの回答は，公式戦の開催が69名で最も多く，次いで交流が49名，イベント開催が48名であった。興味がないや税金の無駄遣い，解散や不要などといった，マイナスイメージの回答も見受けられたが，第一には試合観戦を期待しながらも，回答総数が1,343件あり，全サンプル数1,507サンプルのうち約９割（89.1%）が期待に対する意見を持っていることが明らかとなった。

５．今後の産官学連携について

これまでの調査結果から，レラカムイ北海道，江別市，北翔大学における，産官学連携によるスポーツ振興策として可能性がある項目をいくつか取り上げる。

江別市民の傾向は，運動が好き，みるのは好きという割合が非常に高い（合わせて87.9%）結果であった。１週間の運動時間についても１日数分以上でも運動しているものから，毎日運動している人を合わせると51.4%が運動実践しているといえる。しかし，江別市内のスポーツ施設の活用度合いは28.0%と低かった。その理由には，スポーツ施設へ行かなくても運動実践していることが考えられる。中学高校の運動部活動経験と運動が好きかどうかについては有意な関係性が見られるが，みることについては文化部や部活動経験がなくても割合が高い傾向が見られた。また，レラカムイ北海道やコンサドーレ札幌の公式戦観戦回数は，北海道日本ハムファイターズに比べ少ない傾向が見られた。

江別市民は，市内のスポーツ施設の活用頻度も低く，プロスポーツの公式戦への観戦回数も多くない。これらのことから，江別市内において身近で気軽に見に行ける公式戦を開催し，参加できるようなイベントを開催することは有効であると考える。また，スポーツ施設以外においても人が多く集まるような商業施設，病院，役所などにおいて，身近に交流を図り，なおかつこれらについて広く広報し，情報が行き渡るようにしておくことが有効であると考える。

産官学連携事業としては，江別市内において公式戦開催が出来るよう三者が連携することであると考える。レラカムイ北海道としては，まずはチーム強化が何より先決であろうが，江別市内において，これまで以上にファン拡大に努め，市民にPR出来るようなイベントなどを実施したい。そのために，江別市は公的機関として公平な参加機会を提供し，北翔大学はイベントの実施会場や公開練習場所の提供，体力測定や研究協力を推進し，学生のマンパワーも生かしていくことが考えられる。

こうした産官学連携策が，江別市において「レラカムイ北海道」によるスポーツ振興策として適当であるのか，あるいは実施実践が可能であるのかについては，今後三者で協議を進めなければならない。江別市内での公式戦に多くの市民が観戦行動をとり，継続して多くの江別市民が関連イベントに参加すれば，「レラカムイ北海道」による交流が図られ，「みるスポーツ」への参加機会は増加する。さらに，「するスポーツ」実施率にも影響が及ぶことになれば，江別市のスポーツ振興が図られたと考えるものである。

Ⅳ．ま　と　め

本研究では，産官学連携事業による江別市のスポーツ振興策について，産であるプロバスケットボールチーム「レラカムイ北海道」と官である江別市，そして学の北翔大学の連携事業によるスポーツ振興策を，江別市民に対する調査結果から検討した。その結果，以下のことが明らかとなった。

1）江別市民は，運動が好きあるいはみるのは好きを合わせると87.9%を占めたため，運動に対して非常に好意的であった。

2）江別市民の１週間の運動実施状況は，１日数分程度から，２～３日定期的，毎日，あるいは気が向いたときも含めると51.4%が運動を実施していた。

3）江別市内のスポーツ施設の活用状況は28%と低いが，施設を使用しないでできる運動を実施している。

4）レラカムイ北海道の公式戦観戦回数や，イベント参加回数がともにほぼ無く，人気や認知度，周知やPRが不足している。

5）産官学連携についての期待は，公式戦の開催が最も多く，交流やイベントなどを89.1%が期待する意見を持っていた。

6）産官学が連携し，江別市民に対して，江別市内において身近で気軽に見に行ける公式戦の開催や，スポーツ施設以外で多く人が集まる場所でのイベント開催を計画することが有効ではないかと考える。

以上の結果より，今後，産官学連携策については，具体的に三者により協議しなければならない。そして，産官学が連携し実際に方策を実施することによって，市民の「みるスポーツ」への参加機会が増え，ひいては「するスポーツ」の実施率を向上すると考える。こうしたことにより，江別市のスポーツ振興が図られたと考えるものである。

追　　記

レラカムイ北海道は，平成23年１月19日，日本バスケットボールリーグ（JBL）より，諸般の事情により除名が通告され，以降チーム運営は日本バスケットボールオペレーションズ（JBO）に引き継がれた。名称は「北海道バスケットボールクラブ」として，選手は全員再契約し再スタートしている。

そして，平成23年５月10日，日本バスケットボールリーグ・北海道バスケットボールクラブの新運営会社が設立された。チームは今後設立される一般社団法人が運営母体となることで６月９日来季のリーグ参入が認められた[7)8)]。

北海道バスケットボールクラブはレラカムイ北海道と同様，北海道のプロスポーツとして今後北海道のスポーツ文化の発展に寄与していくものと考えられる。江別市のプロスポーツのひとつとして今後も検討していきたいと思う。

付　　記

本研究は，平成22年度北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センターの研究費および平成21年度江別市大学連携調査研究事業補助金を受けて行ったものである。

引用参考文献

1）文部科学省：HP 大学等における産学官連携，http：//www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/sangaku/main7_a5.htm.

2）有川秀之，太田涼，野間薫，宮崎拓巳：産学官連携によるスポーツ指導者講習会の成果と課題，埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 7，243-251，2008-3.

3）久野譜也：産・官・学プロジェクトによる新しい地域ヘルスプロモーションシステム ： 筑波大学発ベンチャー「つくばウエルネスリサーチ」の試み，臨床スポーツ医学21（11），1239-1244，2004.

4）千葉直樹，永谷稔，石澤伸弘：地方会場におけるレラカムイ北海道の観戦者実態調査－稚内・釧路会場の調査結果から－，北方圏生涯スポーツ研究センター年報創刊号，1-8，2010.

5）内閣府：体力・スポーツに関する世論調査，内閣府大臣官房広報室，2009.

6）石澤伸弘，永谷稔：プロバスケットボール観戦者の観戦行動特性に関する研究，北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要，創刊号，51-58，2010.

7）北海道新聞：バスケ北海道新会社を設立　折茂社長「悩み決断」年棒査定などGM一任，2011.5.11付記事.

8）北海道新聞：バスケ北海道社団化　資金集め難航　窮余の策震災も影響　企業の反応鈍く，2010.6.10付記事.

抄　　録

本研究では，産官学連携事業による江別市のスポーツ振興策について，産であるプロバスケットボールチーム「レラカムイ北海道」と官である江別市，そして学の北翔大学の連携事業によるスポーツ振興策を，江別市民に対する調査結果から検討した。その結果，以下のことが明らかとなった。

1）江別市民は，運動が好きあるいはみるのは好きを合わせると87.9%を占めたため，運動に対して非常に好意的であった。
2）江別市民の１週間の運動実施状況は，１日数分程度から，２～３日定期的，毎日，あるいは気が向いたときも含めると51.4%が運動を実施していた。
3）江別市内のスポーツ施設の活用状況は28%と低いが，施設を使用しないでできる運動を実施している。
4）レラカムイ北海道の公式戦観戦回数や，イベント参加回数がともにほぼ無く，人気や認知度，周知やPRが不足している。
5）産官学連携についての期待は，公式戦の開催が最も多く，交流やイベントなどを89.1%が期待する意見を持っていた。
6）産官学が連携し，江別市民に対して，江別市内において身近で気軽に見に行ける公式戦の開催や，スポーツ施設以外で多く人が集まる場所でのイベント開催を計画することが有効ではないかと考える。

以上の結果より，今後，産官学連携策については，具体的に三者により協議しなければならない。そして，産官学が連携し実際に方策を実施することによって，市民の「みるスポーツ」への参加機会が増え，ひいては「するスポーツ」の実施率を向上すると考える。こうしたことにより，江別市のスポーツ振興が図られたと考えるものである。